4. 恋愛・性の健康

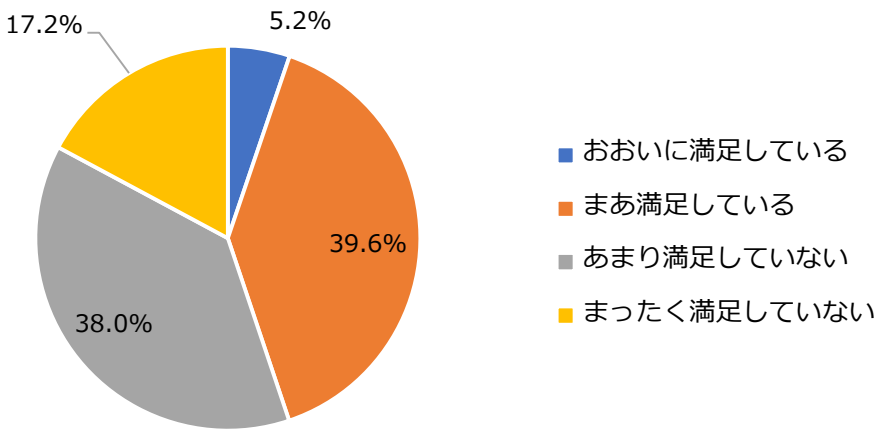
■性生活

この１年間のセックスの頻度は、「月に 2～3 回」の 236 人（22.7%）ともっとも多く、次いで多いのが「まったくしていない」が 182 人（17.5%）でした。

これまで同性とセックスしたことがある人は 1007 人（97.0%）であり、その割合を性別で見ると、男性では 98.4%、女性では 25.0%でした。

今の性生活に「おおいに／まあ満足している」人は 465 人（44.8%）。それに対し「あまり／まったく満足していない」人の割合は 572 人（55.2%）でした（図 4-1）。第 1 回調査にくらべて「おおいに／まあ満足している」割合は 10.4%多くなっていました。

図 4-1 性生活満足度（n=1038）



■特定の付き合っている人・配偶者との関係

特定の付き合っている人・配偶者がいる人は 455 人（43.8%）でした。そのうちこの１年間に相手とセックスしたことがあるのは 249 人（54.7%、以下同様に原則として 455 人中の%）でした。また相手の人数は 1 人が 392 人（86.2%）であり、61 人（13.4%）は相手が 2～7 人と複数でした。主な相手の性別は 415 人（91.2%）が男性。回答者の性別からみると、女性 12 人では相手は全員男性、男性 442 人では 91.0%が相手も男性でした。

その相手との関係についてみますと、期間が 0 年～35 年であり、平均値 6.4 年、中央値（ちょうど真ん中の値）4 年。相手の HIV ステータスは陽性 108 人（23.7%）、陰性 257 人（56.5%）、わからない 89 人（19.6%）。相手との関係を「今後もずっと続けていきたい」「どちらかというと今後も続けていきたい」が、あわせると 436 人（95.8%）となっていました。

その相手に HIV 陽性ということを伝えていたのは 339 人（74.5%）でした。相手に伝えてみて「とても／どちらかといえば良かった」のは 296 人（87.3%、以下同様に原則として 339 人中の%））でした。伝えた理由としてもっとも多かったのは「大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから」で 79.4%、次いで多かったのが「今後、相手に HIV 感染させてしまう可能性があるから」で 40.4%でした（表 4-1）。

表 4-1 あなたがその相手に HIV 陽性ということを伝えた理由（n=339）

	n	%
大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから	269	79.4%
今後、相手にHIV感染させてしまう可能性があるから	137	40.4%
相手にHIV検査を受けてもらいたかったから	74	21.8%
HIV陽性者に対する差別や偏見があまりない相手だと思ったから	61	18.0%
HIVに対する理解がない相手とは付き合えないと思うから	57	16.8%
体調が悪くなり、伝えざるをえない状況になったから	51	15.0%
HIV陽性であることがわかれば、相手といい関係が築けると思うから	49	14.5%
相手がHIV陽性者なので、同じHIV陽性者同士で理解しあえると思ったから	48	14.2%
伝えるタイミング（時間や場所）が見つかったから	26	7.7%
相手からHIV感染したかもしれないと思うから	23	6.8%
治療を受けウイルス量が低いため、相手にHIV感染させるリスクはないと思うから	19	5.6%
自分への世話や面倒をしてもらいたいから	13	3.8%
孤立していてさびしかったから	12	3.5%
HIVを伝えることで、相手があなたから離れてほしいと思ったから	9	2.7%
その場のノリで	6	1.8%
HIVの薬や身体障害者手帳を見られたり問い詰められたりしたから	5	1.5%

また相手に伝えるときに工夫した点についてもっとも多かったのは「HIV 陽性と伝える適切なタイミングを待った」で 23.6%、次いで多かったのが「伝えたい内容や言葉を事前に整理したり、シミュレーションしたりした」で 15.0%でした。「特に工夫はしなかった」人も 38.1%いました（表 4-2）。

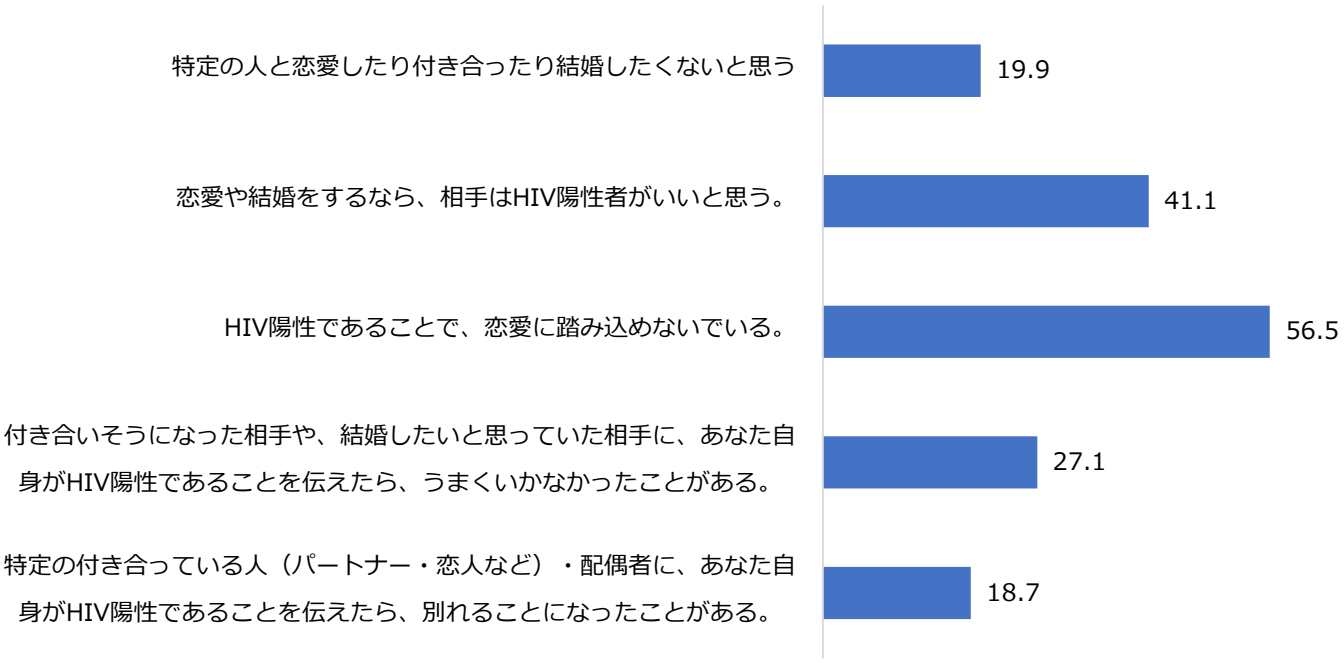
表 4-2　相手に HIV 陽性ということを伝えるときに工夫した点（n=339）

	n	%
HIV陽性と伝える適切なタイミングを待った	80	23.6%
伝えたい内容や言葉を事前に整理したり、シミュレーションしたりした	51	15.0%
相手の人柄やHIVに関する知識・イメージがどんなものか様子を見て、大丈夫そうだと思って伝えた	46	13.6%
HIVの薬を飲んでいるところや通院するところを隠さなかった	28	8.3%
持病があって医療機関に通っていることだけをまず伝えた	24	7.1%
HIVやエイズについての話題をさりげなくしてみて反応を見た	22	6.5%
医療機関に一緒に行き医師や看護師から説明してもらった	21	6.2%
HIV検査を受けないかと誘ってみた	13	3.8%
HIVやHIV陽性者の生活に関する冊子などの資料を相手の身近に置いた	7	2.1%
他のHIV陽性者の経験談を参考にした	6	1.8%
HIV陽性の知り合いに同席してもらった	1	0.3%
特に工夫はしなかった	129	38.1%

■恋愛についての考え

図 4-2 のように、HIV 陽性であることで、恋愛に踏み込めないでいる人は半数以上にのぼっていました。また、実際に付き合っていた相手や付き合いそうになった相手と HIV 陽性であることが原因でうまくいかなかった経験を持っている人も 2～3 割近くいました。

図 4-2 恋愛についての考え（%, n=1038）



■その場限りの相手とのセックス

その場限りの相手とのセックスがこの 1 年間にあったとする人は 728 人（全体の 70.1%）。セックスの回数は 1～1000 回で、平均値 22.2 回、中央値 10 回。年間で 50 回を超える人も 115 人いました（その場限りの相手とのセックスがこの 1 年間にあった 728 人中 15.8%、以下同様に原則として 728 人中の%）。

相手の性別がすべて男性であったのは 710 人（97.5%）。回答者の性別からみると、男性では 718 人中 97.6%が相手も男性でした。相手の HIV ステータスは「ほぼ全員陽性」15 人（2.1%）、「一部陽性」125 人（17.2%）、「陽性者はまったくいない」30 人（4.1%）、「まったくわからない」557 人（76.5%）。

相手に陽性であることを「ほぼ全員に」「一部に」伝えた人は 171 人（23.5%）。これを相手の HIV ステータス別にみると、相手がほぼ全員陽性の場合 86.7%、一部陽性の場合 76.8%、に比べて、陰性の場合 33.3%、陽性か陰性かわからない場合は 9.3%と低くなっていました。
その場限りの相手に HIV 陽性ということを伝えた理由としてもっとも多かったのは「相手が HIV 陽性者なので、同じ HIV 陽性者同士で理解しあえると思ったから」で 45.0%（以下同様に原則として 171 人中の%）、次いで多いのが「大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから」で 38.6%でした（表 4-3）。

表 4-3　その場限りの相手に HIV 陽性ということを伝えた理由（n=171）

	n	%
相手がHIV陽性者なので、同じHIV陽性者同士で理解しあえると思ったから	77	45.0%
大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから	66	38.6%
その場のノリで	35	20.5%
HIV陽性であることがわかれば、相手といい関係が築けると思うから	30	17.5%
HIV陽性者に対する差別や偏見があまりない相手だと思ったから	29	17.0%
治療を受けウイルス量が低いため、相手にHIV感染させるリスクはないと思うから	25	14.6%
伝えるタイミング（時間や場所）が見つかったから	25	14.6%
HIVに対する理解がない相手とは付き合えないと思うから	13	7.6%
相手にHIV検査を受けてもらいたかったから	8	4.7%
相手からHIV感染したかもしれないと思うから	5	2.9%
HIVの薬や身体障害者手帳を見られたり問い詰められたりしたから	4	2.3%
体調が悪くなり、伝えざるをえない状況になったから	2	1.2%
孤立していてさびしかったから	2	1.2%
伝えずに関係を持つ事は良くないと思ったから	1	0.6%

■特定のセックスパートナーとのセックス

特定のセックスパートナーとのセックスがこの1年間にあったとする人は451人（43.4%）と、特定の付き合っている人・配偶者、およびその場限りの相手と比べると、中間に位置する割合でした。セックスの回数は1～100回で、平均値12.4回、中央値6回。年間で50回以上の人は27人（特定のセックスパートナーとのセックスがこの1年間にあった451人中6.0%、以下同様に原則として451人中の%いました。特定のセックスパートナーの数は1人～100人で、平均値4.1人、中央値2人でした。

その相手の性別がすべて男性であったのは438人（97.1%）でした。回答者の性別からみますと、女性6人のうち5人は相手が男性、男性では440人中97.3%が相手も男性でした。相手のHIVステータスは「ほぼ全員陽性」43人（9.5%）、「一部陽性」88人（19.5%）、「陽性者はまったくいない」58人（12.9%）、「まったくわからない」261人（57.9%）でした。

相手に陽性であることを「ほぼ全員に」「一部に」伝えた人は205人（45.5%）。これについても、相手のHIVステータス別にみると、相手がほぼ全員陽性の場合95.3%、一部陽性の場合87.5%、陰性の場合72.4%に比べて、陽性か陰性かわからない場合は17.2%と低くなっていました。
特定のセックスパートナーにHIV陽性ということを伝えた理由としてもっとも多かったのは「大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから」で48.8%（以下同様に原則として205人中の%）、次いで多かったのが「相手がHIV陽性者なので、同じHIV陽性者同士で理解しあえると思ったから」で39.5%でした（表4-4）。

表4-4 特定のセックスパートナーにHIV陽性ということを伝えた理由（n=205）

	n	%
大切なことなので相手に伝える必要があると思ったから	100	48.8%
相手がHIV陽性者なので、同じHIV陽性者同士で理解しあえると思ったから	81	39.5%
今後、相手にHIV感染させてしまう可能性があるから	39	19.0%
HIV陽性であることがわかれば、相手といい関係が築けると思うから	34	16.6%
HIV陽性者に対する差別や偏見があまりない相手だと思ったから	22	10.7%
相手にHIV検査を受けてもらいたかったから	19	9.3%
その場のノリで	19	9.3%
治療を受けウイルス量が低いため、相手にHIV感染させるリスクはないと思うから	18	8.8%
HIVに対する理解がない相手とは付き合えないと思うから	17	8.3%
伝えるタイミング（時間や場所）が見つかったから	14	6.8%
相手からHIV感染したかもしれないと思うから	10	4.9%
HIVの薬や身体障害者手帳を見られたり問い詰められたりしたから	5	2.4%
HIVを伝えることで、相手があなたから離れてほしいと思ったから	3	1.5%
体調が悪くなり、伝えざるをえない状況になったから	2	1.0%
自分への世話や面倒をしてもらいたいから	1	0.5%
孤立していてさびしかったから	1	0.5%

■セックスに関連した諸経験：性感染症

これまでに罹患したことがある性感染症として１割以上の方があげたものを多い順に並べると、梅毒 200 人（19.3%）、毛じらみ 182 人（17.5%）、B 型肝炎 116 人（11.2%）、尖圭コンジローマ 107 人（10.3%）となっていました。

5. 薬物使用

■薬物の使用経験について

図 5-1 過去の薬物使用経験（N=1038）

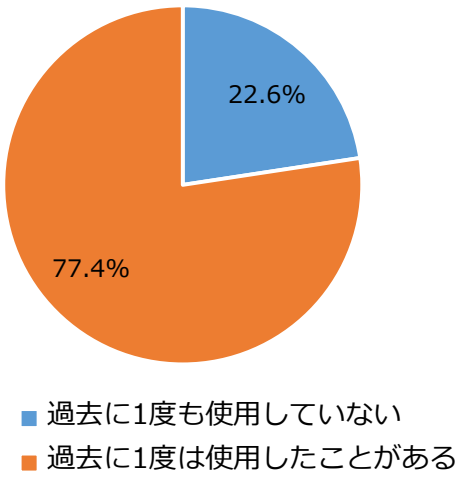
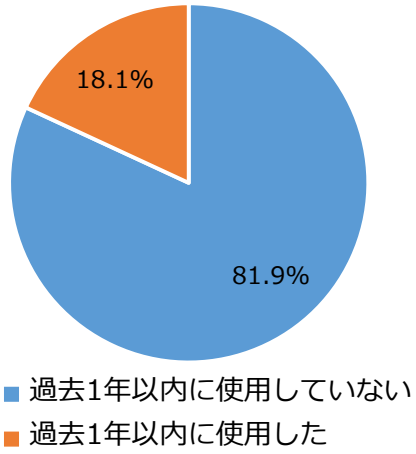
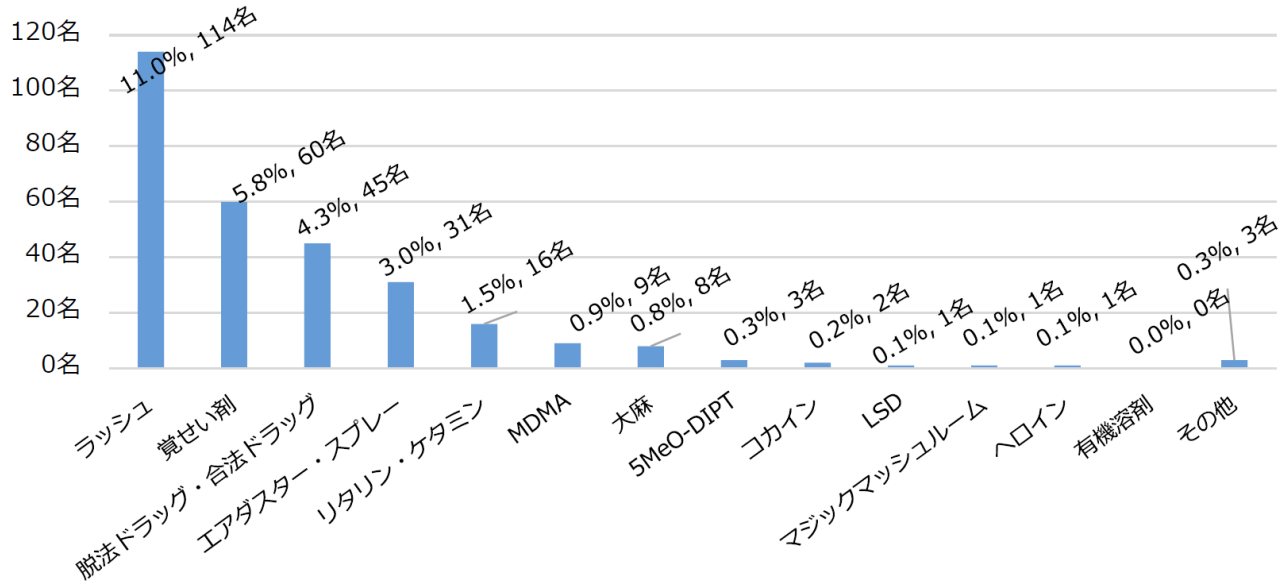


図 5-2 過去 1 年間の使用経験（N=1038）



過去に薬物を 1 度も使用していない人は 235 人（22.6%）、一度は使用したことがあるとした人は 803 人（77.4%）でした（図 5-1）（第 1 回調査時は、一度も使用していない：一度は使用したことがある＝25.6%：74.4%）。
また、過去 1 年以内に使用したことがある人は 188 人（18.1%）、過去 1 年以内に使用していない人は 850 人（81.9%）でした（図 5-2）（第 1 回調査時は、過去 1 年以内に使用した：過去 1 年以内に使用していない＝31.2%：68.8%）。

図 5-3　過去 1 年以内の薬物の使用状況（n=1038）



過去 1 年間で使用した薬物の種類として最も多かったのはラッシュで 114 人（11.0%）で、次に覚せい剤（60 人 5.8%）、脱法ドラッグ・合法ドラッグとして売られているもの（45 人、4.3%）の順になっていました（図 5-3）。第 1 回調査結果でもっとも多かったのはラッシュ（229 人、25.1%）でしたが、第 2 回調査結果では、使用者割合は半分以下となっていました。 また、脱法ドラッグ・合法ドラッグとして売られているものは第 1 回調査結果（124 人、13.6%）と比較して 3 分の 1 以下の使用者割合となっていました。他方で、覚せい剤は第 1 回調査結果（47 人、5.1%）と第 2 回調査結果とではほぼ同水準でしたが、脱法ドラッグ・合法ドラッグとして売られているものの使用者の低下に伴い、相対的に順位は 2 番目に上昇していました。

■薬物使用時の注射針の使用

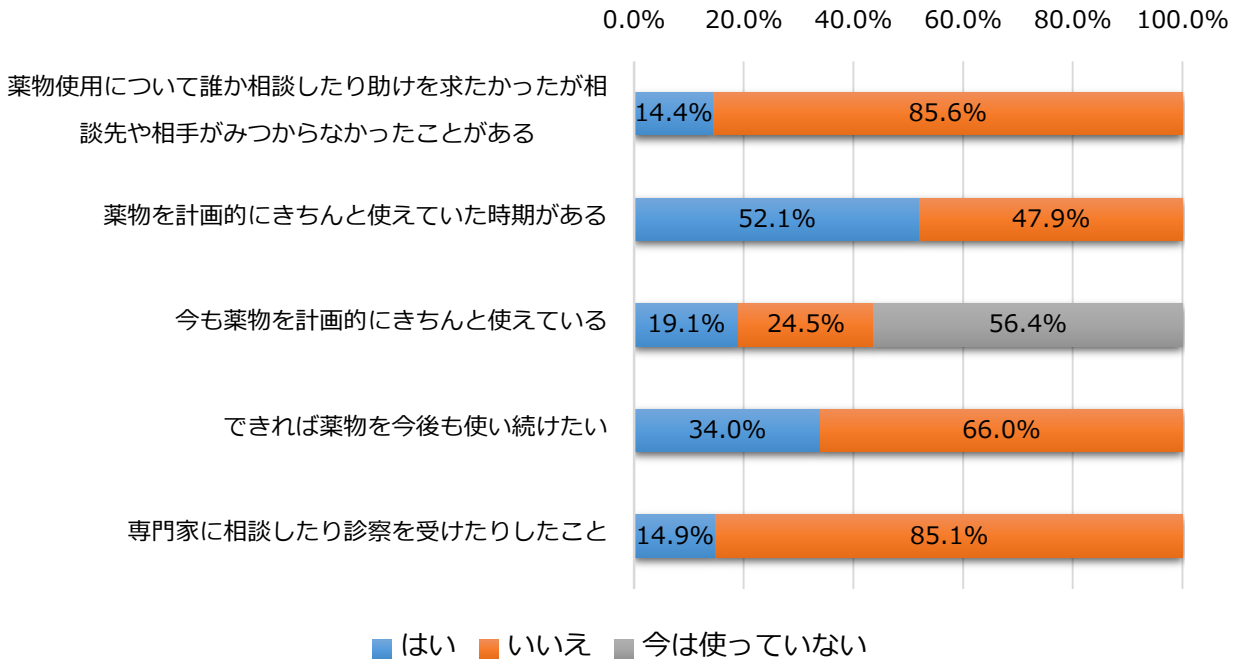
過去 1 年間で注射針によって薬物を体内に注入したことがある人は 50 人でした。この 50 人のうち、注射針の使用にかかわる経験としては、「別の日に使った古い注射器を再度使った」（26 人）、「注射針を刺したところが内出血した」（25 人）、「注射器をうまく使えず何度も針を刺した」（21 人）、「注射針を刺したところの痛みが数日続いた」（13 人）、「別の人が使った注射器を洗って使った」（9 人）、「同じ注射器を使って他の人と回し打ちをした」（5 人）でした。

■薬物使用に関する経験と考え方

過去 1 年間に薬物を使用したことがある 188 人においてみてみると、「薬物使用について誰か相談したり助けを求たかったが相談先や相手がみつからなかったことがある」人は 27 人（14.4%）、また、「これまでにあなたは、ご自身の薬物使用や薬物依存症について、専門家に相談したり診察を受けたりしたことはありますか」に対して、「ある」と回答した人は 28 人（14.9%）でした。

薬物使用に対して、これまでに「薬物を計画的にきちんと使えていた時期がある」と回答した人は 98 人（52.1%）、さらに、「今も薬物を計画的にきちんと使えている」と回答した人は 36 人（19.1%）でした。「できれば薬物を今後も使い続けたい」とした人は 64 人(34.0 %)となっていました（図 5-4）。

図 5-4　薬物使用にかかわる経験・考え方（n=188）



■薬物使用の目的

過去 1 年間に薬物使用をした人の薬物使用の目的について複数回答形式でたずねました。その結果を該当者が多い順に表 5－1 に示してあります。もっとも多いものは「セックスの快感を高める方法」、次いで「ストレス発散の方法」、「ゲイライフをエンジョイするためのもの」、「孤独感を解消する方法」が続いていました。

表 5-1　薬物使用の目的別該当者人数

薬物を使う意味	人数	(n=188)
セックスの快感を高める方法	156 人	(83.0%)
ストレス発散の方法	64 人	(34.0%)
ゲイライフをエンジョイするためのもの	50 人	(26.6%)
孤独感を解消する方法	23 人	(12.2%)
あえて背徳感にひたるためのもの	20 人	(10.6%)
心の健康を保ったり向上させたりするための特効薬	15 人	(8.0%)
死にたい気持ちに対処する方法	15 人	(8.0%)
やめられないもの	14 人	(7.4%)
人とつながるためになくてはならないもの	12 人	(6.4%)
暇な時間を費やすためのもの	11 人	(5.9%)
自分の存在を他の人にアピールする手段	6 人	(3.2%)
都会生活をエンジョイするためのもの	6 人	(3.2%)

■当事者ミーティング、12 ステップ、心理療法

これまでに自身の薬物使用や薬物依存症について、専門家に相談したり診察を受けたりしたことがある人は、過去 1 年以内に薬物を使用したことがある 188 人中 28 人（14.9%）でした。

NA（ナルコティクスアノニマス・薬物依存者の集まり）など、薬物依存症当事者のミーティングや自助グループに当事者として参加したことがある人は、過去 1 年以内に薬物を使用したことがある 188 人中 20 人（10.6%）、知っているが参加したことはない人は 89 人（47.3%）、当事者のミーティングや自助グループがあることを今初めて聞いた人は 35 人（18.6%）となっていました。

12 ステップについては、すべて取り組んだ人は 3 人（1.6%）、一部を取り組んだ人は 9 人（4.8%）、12 ステップという言葉を今初めて聞いたという人は 129 人（68.6%）でした。一方、SMARPP（せりがや覚せい剤依存再発防止プログラム）については、すべて取り組んだ人は 2 人（1.1%）、一部を取り組んだ人は 1 人（0.5%）であり、SMARPP という言葉を今初めて聞いた人が 140 人（74.5%）でした。

SMARPP 以外の認知行動療法などの心理療法については、受けたことがあるし今も受けている人が 4 人（2.1%）、受けたことがあるが今は受けていない人が 7 人（3.7%）、心理療法という言葉を今初めて聞いた人が 88 人（46.8%）でした。

6．子どもを持つこと

■ 子どもの有無

回答者 1038 人のうち、子どものいる方は 61 人（5.9%）であり、そのうち、実子は 59 人（96.7%）、養子は 2 人（3.3%）でした（図 6-1、図 6-2）。また、子どものいる方 61 人の属性は、【性別】男性 57 人(93.4%)・女性 4 人(6.6%)、【セクシャリティ】ゲイ 31 人(50.8%)、バイセクシャル 20 人(32.8%)、ヘテロセクシャル 9 人(14.8%)、【年代】20 代 1 人(1.6%)、30 代 8 人(13.1%)、40 代 25 人(41.0%)、50 代以上 27 人（44.3%）でした。

図 6-1　子どもの有無（N=1038）

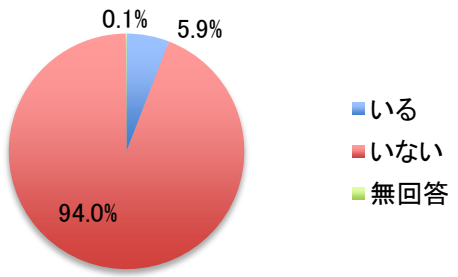
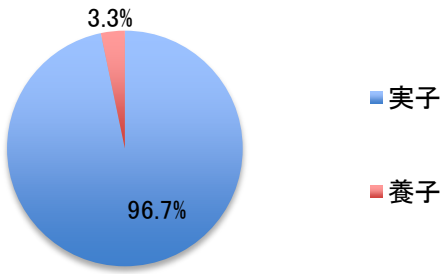


図 6-2 子どもの内訳（n=61）



一方、子どものいない方 976 人のうち、HIV 陽性を理由に子どもを持つことを諦めた経験のある方は 272 人（27.9%）でした（図 6-3）。

子どものいない方のうち、子どもを欲しいと思っている割合は 265 人（27.2%）であり、その希望（複数回答）は、実子 208 人（78.5%）、養子 117 人（44.2%）、里子 78 人（29.4%）でした（図 6-4）。また、子どもを持つことを希望している方の属性は、【性別】男性 252 人（95.1%）・女性 10 人（3.8%）、【セクシャリティ】ゲイ 204 人（77.0%）、バイセクシャル 48 人（18.1%）、ヘテロセクシャル 11 人（4.2%）、【年代】10 代 1 名（0.4%）、20 代 49 人（18.5%）、30 代 103 人（38.9%）、40 代 89 人

（33.6%）、50 代以上 21 人（7.9%）でした。

子どものいない方のうち、HIV 陽性であっても子どもを持つ方法があることをよく知っていると回答した方は 185 人（19.0%）である一方、まったく知らないと回答した方は 341 人（34.9%）となっていました（図 6-5）。

図 6-3 子どものいない方のうち、HIV 陽性を理由に子どもを持つことを諦めた経験の有無（n=976）

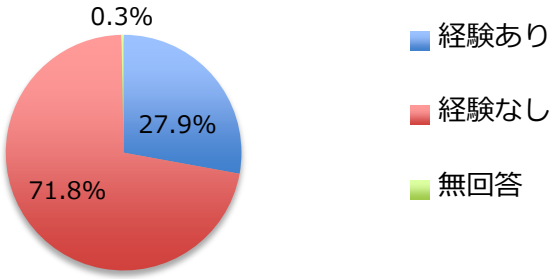


図 6-4 子どものいない方のうち、子どもを欲しいと思っている割合（n=976）

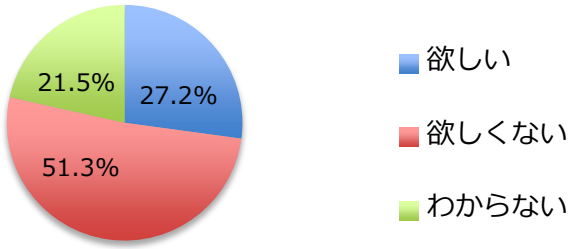
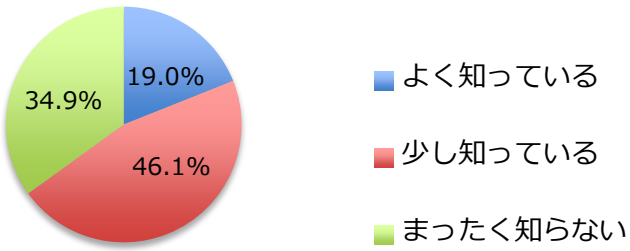


図 6-5 子どものいない方のうち、HIV 陽性であっても子どもを持つ方法があることを知っている割合（n=976）



■ 子どもを持つことによる変化

子どものいる方 61 人に、子どもを持ってよかったことを尋ねたところ、「子どもを持つことの喜びを感じられたこと」といった回答がもっとも多く、次いで、「夫婦の絆が強まったこと」、「自分自身への肯定的な変化があったこと」といった意見がみられました（図 6-6）。一方、子どもを育てるにあたっての不安や苦労を尋ねたところ、「自身の HIV 感染の子どもへの説明」といった回答がもっとも多く、次いで、「HIV に関連して、自身のセクシャリティを伝えることになるかもしれないこと」、「子どもや自分自身への HIV に関連した差別・偏見」といった意見がみられました（図 6-7）。

また、第 1 回の調査においても、子どもを育てるにあたっての不安や苦労を尋ねたところ、「自身の HIV 感染の子どもへの説明」の回答が多くみられたため、今回の第 2 回調査では、子どもに自身の HIV 陽性を具体的にどのように伝えたかまたは伝えていない場合はその理由を自由記載で尋ねました。

その結果、41 人より回答を得、子どもに HIV 陽性を伝えた方は 5 人（12.2%）、HIV 陽性を伝えていない方は 36 人（87.8%）でした。子どもへの伝え方としては、「ゲイ・HIV 陽性の友人と一緒に会う機会を増やしたり、HIV 啓発や HIV について子どもがどう認識しているかを聞いてみたりして、最終的には自身の書いた患者としてのブログを見せた」、「時間を作り、病気に関する知識と私自身の感染事実を説明した」などがありました。

一方、HIV 陽性を伝えていない方 36 人のうち、今後伝える予定と回答した方は 3 人（8.3%）、今後伝えるか悩んでいる（未定）と回答した方は 11 人（30.6%）、「伝えなければいけない理由も伝える事によりメリットも無いので、今後も伝えるつもりは無い」、「自分の父親が HIV と知ったら絶望するだろうから」、「自分のセクシャルティーを知られたくない」などの理由から、今後も伝える予定はないと回答した方は 22 人（61.1%）でした。

図 6-6 子どもを持ってよかったこと（%, n=61, 複数回答）

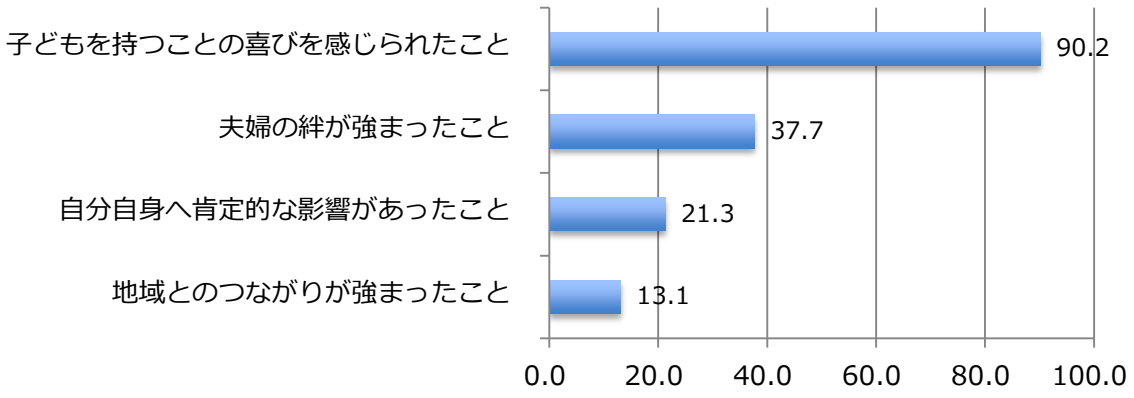
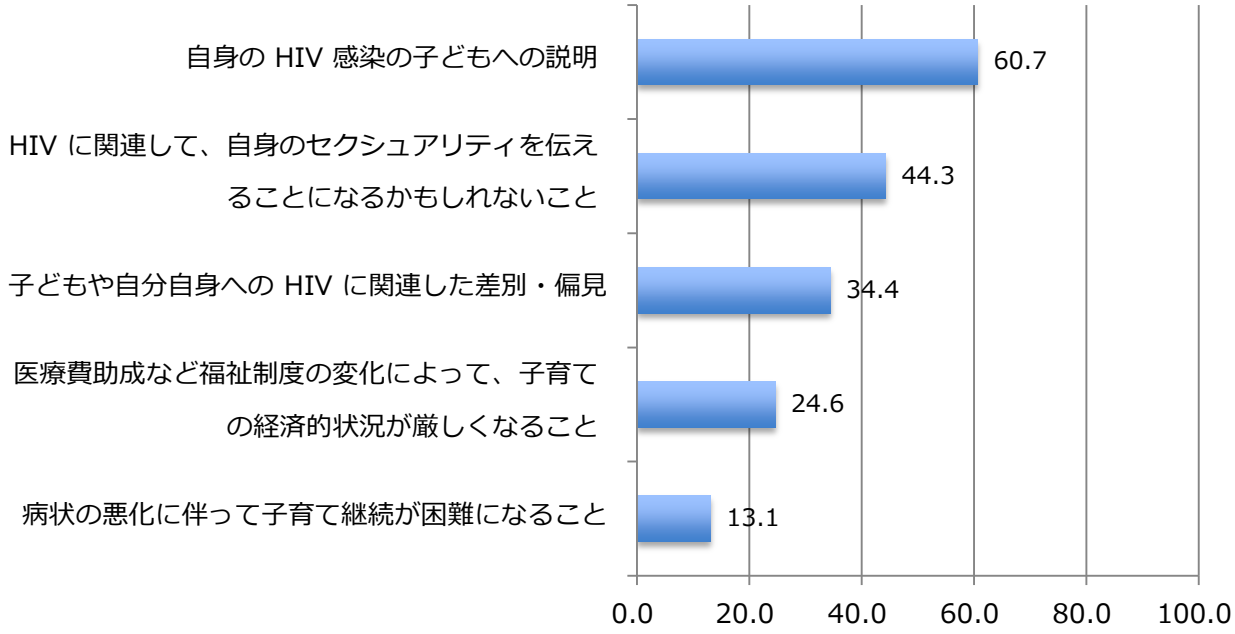


図 6-7 子どもを育てるにあたっての不安や苦労（%, n=61, 複数回答）

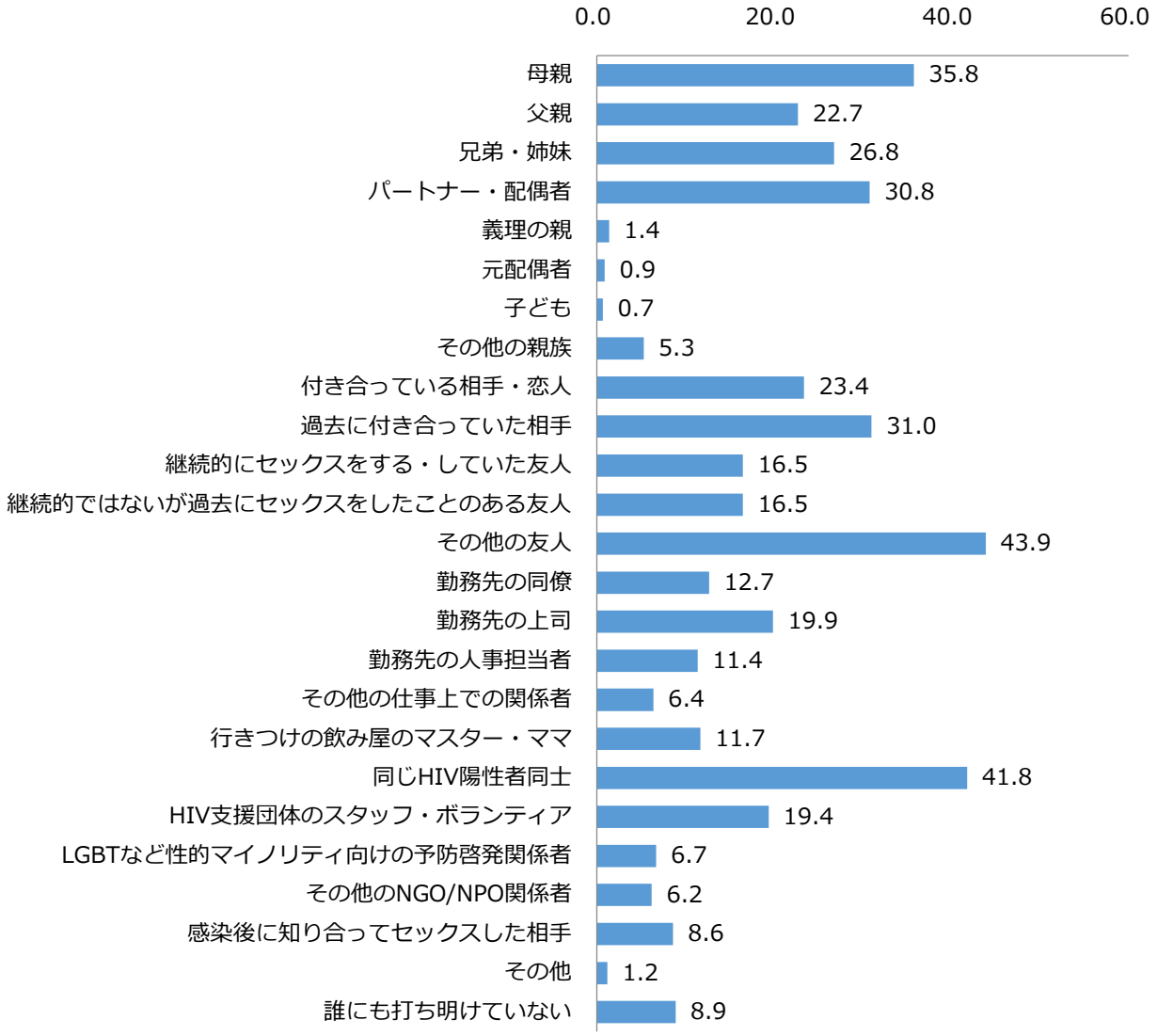


7. 周囲の人々や社会との関係

■HIV 陽性者であることを伝えること（図 7-1）

1038 人中、946 人（91.1%）が、HIV 陽性であることを少なくも 1 人以上に伝えていました。
伝えた相手としてもっとも多くあげられたのは、「その他の友人」で 43.9%、次いで同じ HIV 陽性者同士 41.8%、母親 35.8%、過去に付き合っていた相手 31.0%、パートナー・配偶者 30.8%という結果でした。誰にも打ち明けていない人も 8.9%存在しました。

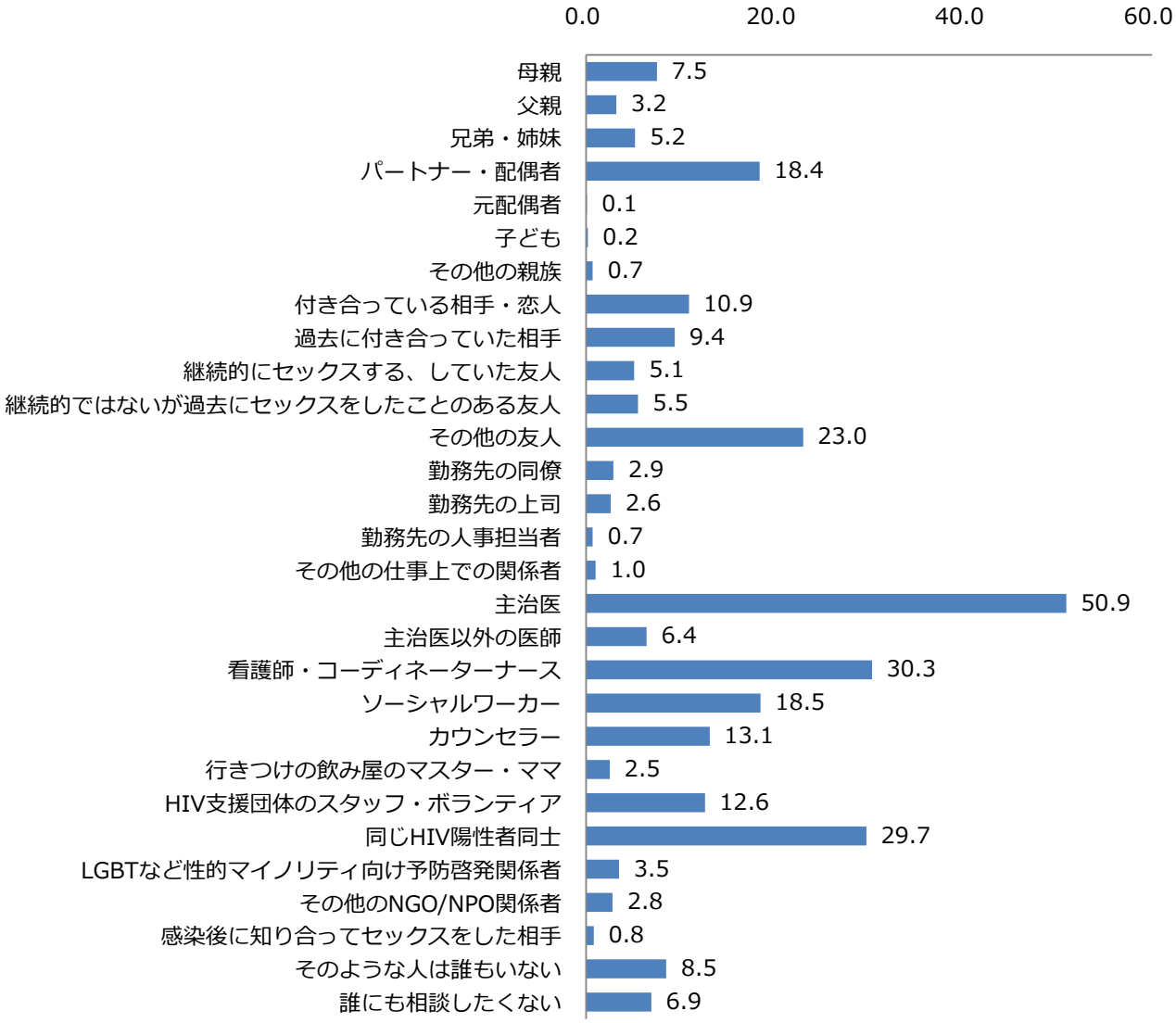
図 7-1 HIV 陽性者であることを伝えた相手（%, n=1038, 複数回答）



■HIV に関連した悩み事の相談相手（図 7-2）

HIV に関連した悩み事の相談相手として、もっとも多くあげられたのは主治医で、50.9%と半数以上であげられていました。次いで、看護師・コーディネーターナースが 30.3%、同じ HIV 陽性者同士が 29.7%という結果であり、医療従事者が多くなっていました。一方で、「そのような人は誰もいない」と回答した人が 8.5%、「誰にも相談したくない」と回答した人が 6.9%存在しました。

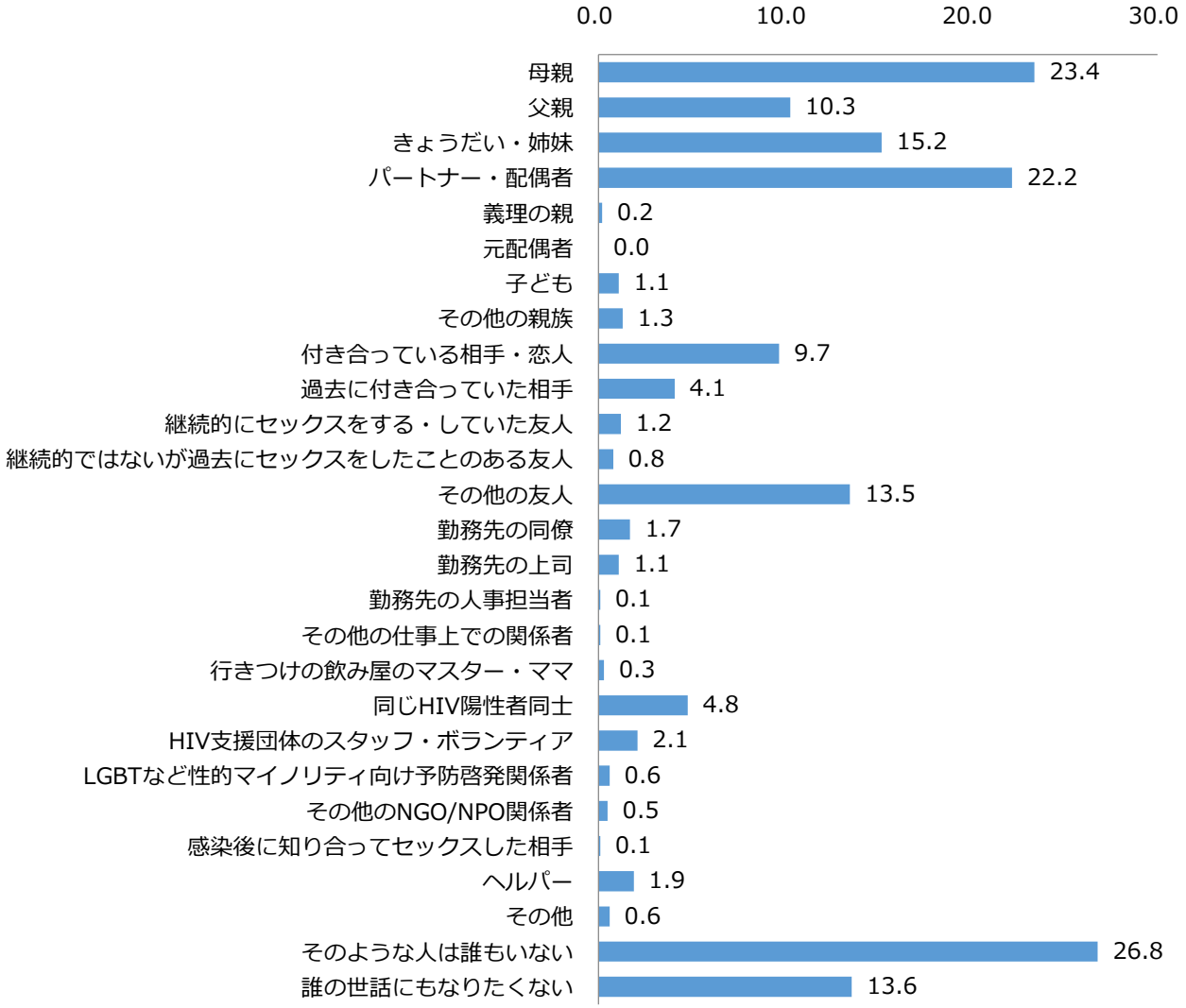
図 7-2 HIV に関連した悩み事の相談相手（%, n=1038, 複数回答）



■必要時に病院への付き添いや介助をしてくれる人（図 7-3）

「そのような人は誰もいない」と回答した人がもっとも多く、26.8%でした。次いで母親が 23.4%、パートナー・配偶者が 22.2%と、多くなっていました。HIV 支援団体のスタッフ・ボランティアをあげた人は 2.1%、ヘルパーが 1.9%であり、家族やパートナー以外をあげる人は少ない状況にありました。また、13.6%が「誰の世話にもなりたくない」と回答していました。以上から、体調が変化した際のサポート源は十分ではない可能性が伺えます。

図 7-3 必要時に病院への付き添いや介助をしてくれる人（%, n=1038, 複数回答）



■HIV に関連するスティグマ

HIV に関連するスティグマとは、「HIV や AIDS とともに生きている、あるいは関連のある人を低く評価するプロセス」（UNDS,2003）とされ、HIV 陽性者に対する不公平・不正義な扱いへとつながり、差別や偏見を生じさせていることが指摘されています。

この調査では、スティグマを「HIV に対する社会からのスティグマの感じ方」、「HIV に対するスティグマにまつわる経験の多さ」、「スティグマによる行動の自主規制」の 3 つの側面から確認することにしました。

なお、今回は詳細について説明を省きますが、第 1 回調査結果と第 2 回調査結果とで、HIV に関連するスティグマの状況を比較すると、全体としてはほぼ同程度で変わっておらず、項目によっては悪化しているものもありました。

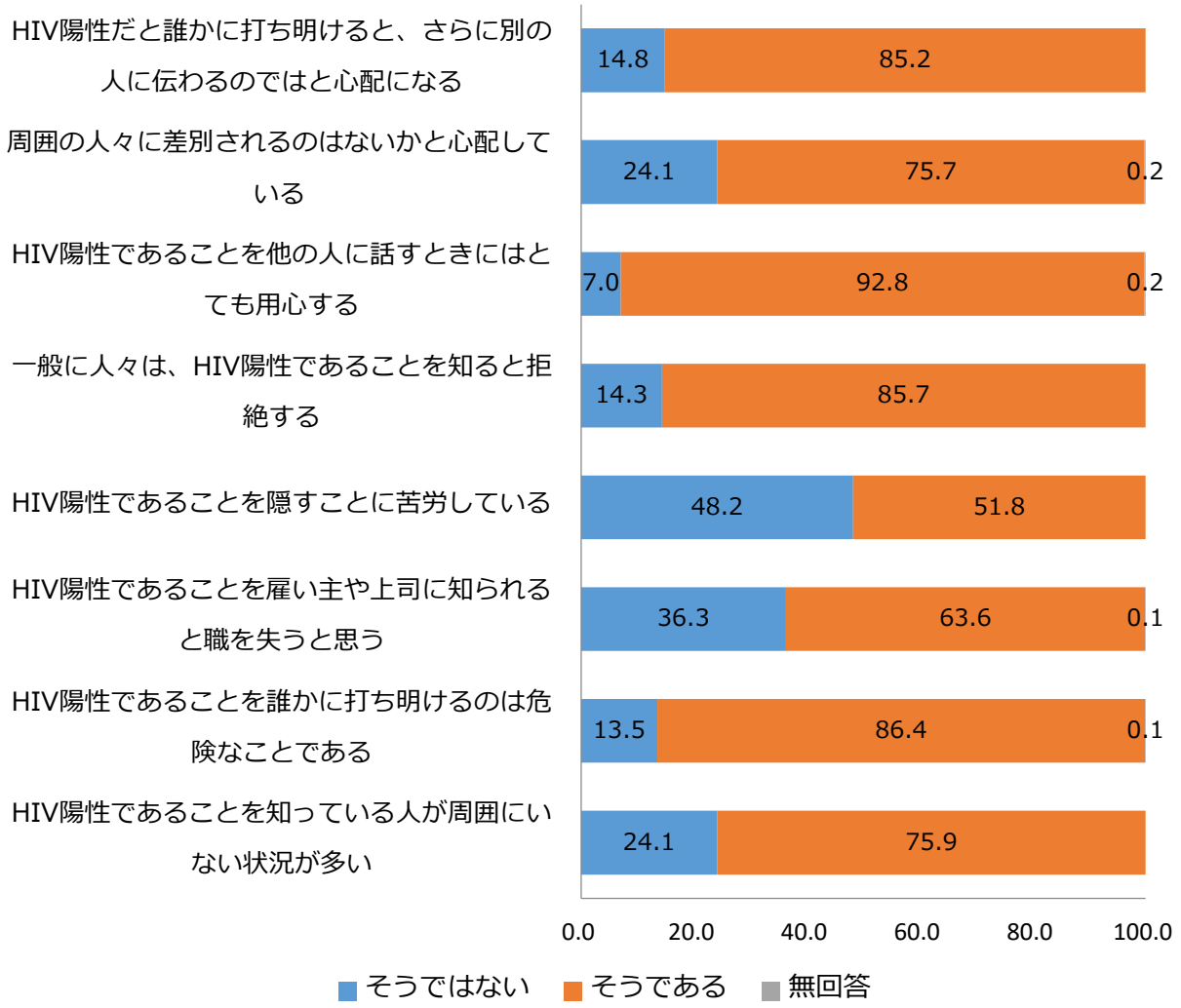
■HIV に対する社会からのスティグマの感じ方（図 7-4）

HIV に対する社会からのスティグマについてどのように感じているかを 8 項目で質問しました。 各質問は、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の 4 段階で回答する形式をとっています。図 7-4 では、「まったくそうではない」「あまりそうではない」を「そうでない」、「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」とし、その割合（%）を以下では紹介します。

「HIV 陽性であることを他の人に話すときにはとても用心する」と回答したのは 92.8%に達していました。「一般に人々は HIV 陽性であることを知ると拒絶する」という人は 85.7%、「HIV 陽性だと誰かに打ち明けると、さらに別の人に伝わるのではと心配になる」という人は 85.2%であり、ほとんどの人が、HIV 陽性であることを知られることに強い不安や心配を感じていることが伺われました。

さらに、「HIV 陽性であることを雇い主や上司に知られると職を失うと思う」では 63.6%が、「そうである」と回答しており、HIV 陽性であることを知られることに対する恐怖を、職を失うといった具体的なものとして捉えている人が少なくありませんでした。

図 7-4 HIV に対する社会からのスティグマの感じ方(%, n=1038)

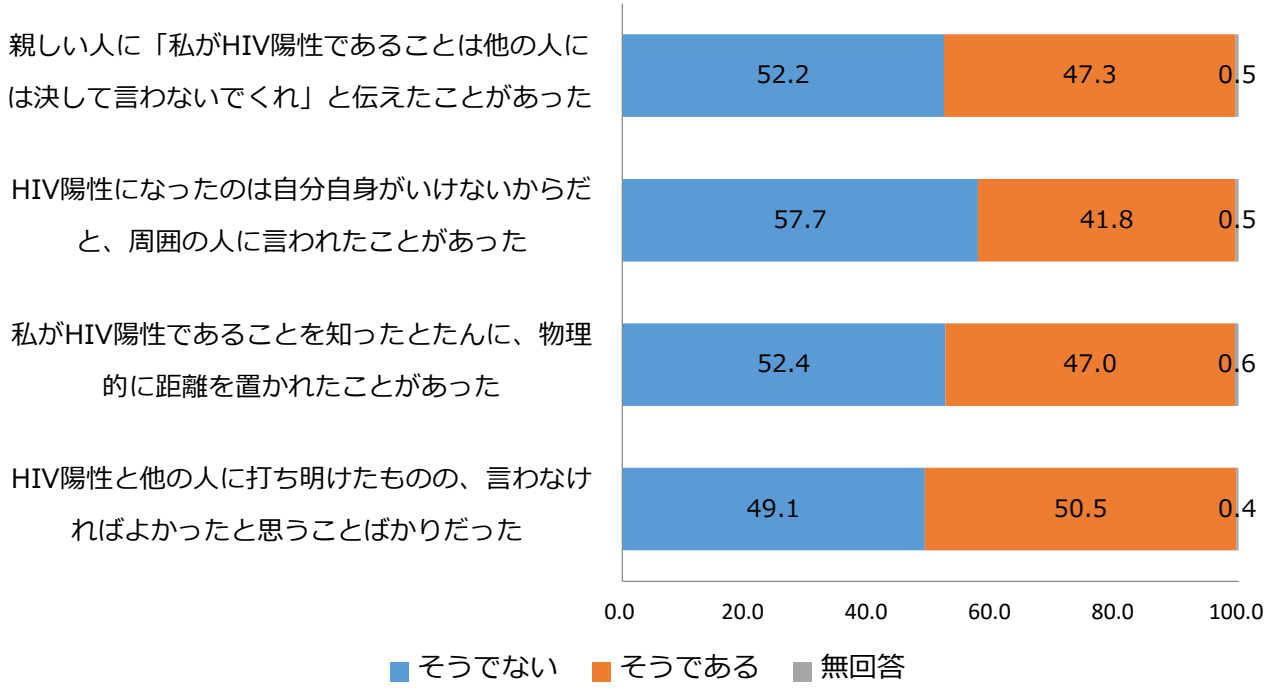


■HIV に対する社会からのスティグマにまつわる経験の多さ（図 7-5）

実際にスティグマを感じるような経験をしたかどうかを 4 項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の 4 段階で回答する形式をとりました。図 7-5 では、「まったくそうではない」「あまりそうではない」を「そうでない」、「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」の 2 つに分け、それぞれの割合を示しています。

50.5%が「HIV 陽性と他の人に打ち明けたものの、言わなければよかったと思うことばかりだった」に対し「そうである」と回答していました。「私が HIV 陽性であることを知ったとたんに、物理的に距離を置かれたことがあった」では 47.0%が、「HIV 陽性になったのは自分自身がいけないからだ、と周囲の人に言われたことがあった」では、41.8%が「そうである」と回答しており、HIV 陽性であることによるネガティブな実体験が各々半数近くの人にありました。

図 7-5 HIV に対する社会からのスティグマにまつわる経験の多さ（%, n=1038）



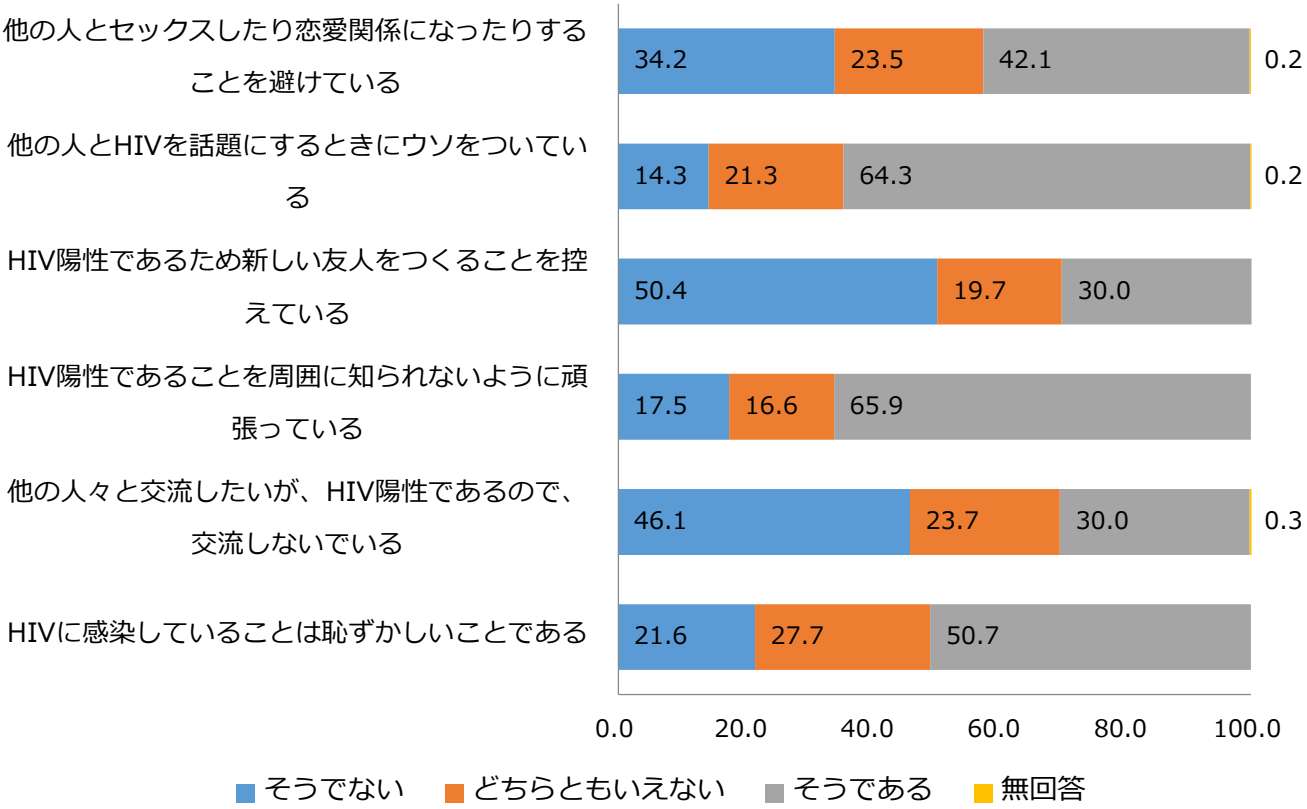
■HIV に対する社会からのスティグマによる行動の自主規制（図 7-6）

HIV に対する社会からのスティグマを感じ、そのために、自らの生活について自主規制としてとらざるを得ない行動について 6 項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「そうではない」「どちらともいえない」「ややそうである」「とてもそうである」の 5 段階で回答する形式です。図 7-6 では、「まったくそうでない」「そうではない」は、「そうでない」、「ややそうである」「とてもそうである」は、「そうである」、「どちらともいえない」はそのままとし、 3 つに分けました。「そうである」「どちらともいえない」「そうでない」の結果を示します。

半数の人（50.7%）が、「HIV に感染していることは恥ずかしいことである」と回答していました。「他の人と HIV を話題にするときにウソをついている」のは 64.3%、「HIV 陽性であることを周囲に知られないように頑張っている」のは 65.9%であり、HIV 陽性であることを周囲に隠すために「嘘をつく」「頑張る」などの行動を自主規制している人は 6 割以上にのぼっていました。

「他の人々と交流したいが、HIV 陽性であるので、交流しないでいる」では、「そうである」は 30.0%、「HIV 陽性であるため新しい友人をつくることをひかえている」では、「そうである」が 30.0%であり、他の人々との交流を実際に控えている人は、3 割程度に留まっていました。しかし一方で、「HIV 陽性であることで、他の人とセックスしたり恋愛関係になったりすることを避けている」については「そうである」が 42.1%であり、セックスや恋愛関係に関する交流は 4 割の人が自主規制を行っている状況にありました。

図 7-6 HIV に対する社会からのスティグマによる行動の自主規制（%, n=1038）



■地域ごとのスティグマの比較

HIV に対する社会からのスティグマの感じ方 8 項目、HIV に対する社会からのスティグマにまつわる経験の多さ 4 項目、HIV に対する社会からのスティグマによる行動の自主規制 6 項目のそれぞれ合計得点の平均点を算出し、地域ごとに違いがあるかを検討してみました。地域は、北海道、東北、東京、東京以外関東甲信越、北陸、東海、大阪、大阪以外近畿、中国、四国、九州、沖縄の 12 の地域と設定ました。統計的に分析したところ、スティグマに対する恐怖の強さ、スティグマによる行動の自主規制において、北関東が東京に比べて有意に得点が高くなっていました。HIV に対する社会からのスティグマにまつわる経験の多さについては、地域ごとの有意差は認められませんでした。結果は表 7- 1 に示しています。

表 7-1 スティグマに対する恐怖の強さ、スティグマにまつわる経験の多さ、スティグマによる行動の自主規制の地域ごとの平均得点の比較

		スティグマに対する恐怖の強さ（8－32点）	スティグマにまつわる経験の多さ（4－16点）	スティグマによる行動の自主規制（6－30点）
地域	（人数）	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差
東京	(336)	24.6 ± 4.8	9.4 ± 3.3	18.9 ± 5.7
北海道	(43)	26.1 ± 4.4	9.7 ± 3.5	19.9 ± 5.6
東北	(25)	25.1 ± 4.6	10.6 ± 3.5	18.6 ± 5.1
北関東	(31)	27.5 ± 3.2	10.7 ± 3.5	22.4 ± 5.4
南関東	(137)	25.5 ± 4.8	9.7 ± 3.4	19.0 ± 5.5
甲信越	(12)	24.9 ± 5.5	9.3 ± 4.9	21.2 ± 6.7
北陸	(14)	26.1 ± 4.3	10.9 ± 2.9	20.6 ± 5.0
東海	(92)	25.5 ± 5.5	10.0 ± 3.5	20.4 ± 5.8
近畿	(203)	25.0 ± 5.0	9.1 ± 3.4	18.9 ± 5.5
中国	(37)	26.0 ± 4.6	10.6 ± 3.2	20.8 ± 5.4
四国	(9)	23.8 ± 4.3	10.8 ± 2.9	19.1 ± 4.6
九州沖縄	(98)	26.2 ± 4.0	9.9 ± 3.5	20.3 ± 5.4
合計	(1037)	25.3 ± 4.8	9.6 ± 3.4	19.4 ± 5.6

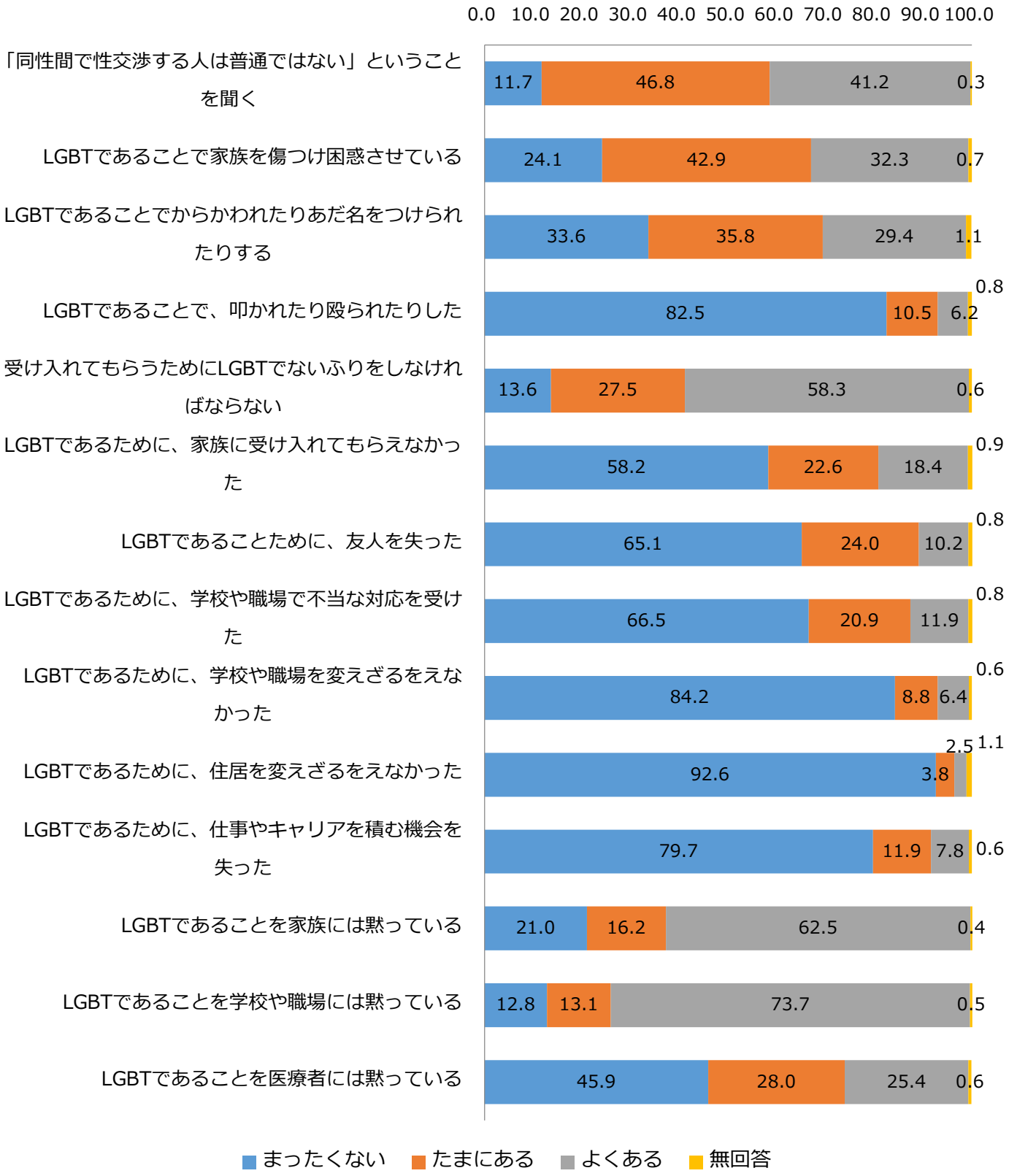
■ゲイ・バイセクシャル・レズビアン・トランスジェンダーに対するスティグマについて（図 7-7）

性的指向や性自認に目を向けて、ゲイ・バイセクシャル・レズビアン・トランスジェンダー（以下 LGBT）に対する偏見に関連する状況について 14 項目で質問しました。各質問は、「まったくない」「たまにある/あった」「よくある/あった」「非常によくある/あった」の 4 段階の回答形式となっています。図 7-7 では、「よくある/あった」と「非常によくある/あった」を統合して「よくある」とし、「まったくない」、「たまにある／あった」、「よくあった」の 3 つとし、結果は主に「「よくある」と「まったくない」について示します。セクシャリティに関する質問でヘテロセクシャルと回答した 36 人を除外した 1002 人の回答を集計しました。

「LGBT であることを家族には黙っている」では、「よくある」が 62.5%であり、6 割以上が家族に LGBT であることを隠していました。また、「自分が LGBT であることで、家族を傷つけ困惑させていると感じる」では、「よくある」は 32.3%、「まったくない」は 24.1%、であり、よくあると感じている人の方が多くなっていました。一方で、「LGBT であるために、家族に受け入れてもらえなかった」では、「よくある」は 18.4%とそれほど多くはありませんでした。

家族以外との関係については、「受け入れてもらうために、LGBT でないふりをしなければならない」で、「よくある」は 58.3%であり、6 割近くの人が受け入れてもらうために、LGBT であることを隠すための行動をとらざるを得ない状況にありました。「LGBT であるために、友人を失った」では、「よくある」は 10.3%、「まったくない」は 65.1%であり、友人関係への影響は比較的少ない様子でした。「LGBT であることを学校や職場の人には黙っている」では、「よくある」は 73.7%であり、学校や職場といった場では、LGBT であることは公にしないと考える人が多いことが伺えました。一方で、LGBT であることを医療者には黙っている」では、「よくある」は 25.4%、「まったくない」は 45.9%、LGBT であることを医療者に伝えている人は半数に満たないことがわかりました。

図 7-7 LGBT に関するスティグマ（%, n=1002）



■HIV に関連した差別・偏見を感じている人へのアドバイスやメッセージ（自由記載）

回答者 320 人（うち、「特になし」39 人）のうち、約４割（132 人）が告知やカミングアウトに関する内容でした。頻出語（よく出てくる言葉）を抽出し、類似した語をカテゴリー化すると、以下のような語が頻出語となっていました。

頻出語：
伝える・カミングアウト・打ち明ける・告げる・告知・告白：205
友人・友達・仲間・当事者・ピア：51
病院・医師・看護師・カウンセラー：38
相談：38
環境・周囲：31
会社・職場・上司・同僚：30
家族・親・父母：22

このように、HIV について伝えることや相談について、相手（友人、病院、職場、家族）と関連した記述が多い特徴がありました。

代表的なもの及び特徴的な記述を以下に示します。なお、頻出語には下線を記してあります。

・一般的にはまだ理解の少ない *HIV* についての話題は極力避けています。まして自分のことを打ち明けられる環境にはないと感じています。 しかし、数少ない信頼できる仲間と話をしたり相談することで、大きく救われています。特に感染初期は不安で一杯になりながらも従来通り仕事や生活をしていくため、家族や友人に打ち明けられない場合は、*NPO* の方や主治医へ悩みを打ち明け力を貸していただくことで、精神的な落ち着きを図れることも多々あると思います。とにかく *1* 人で悩みを抱えない環境を作っていくことはとても大切だと思います。

・ 上司に伝えたのですが、知らない間に同僚にも知られていて、無視や差別的なことをされたので、仮に上司などに伝える場合は伝える相手と場所には注意をしたほうがいい。

・下手な自己満足でカミングアウトはしない方がいい。 医師や看護師、ソーシャルワーカーなどとよく話をしてから方針を決めて動く事が確実。

・伝える相手はしっかり考えて。 感染初期はどうしたらいいかわからないかもしれないけど、誰彼構わず相談しないように。 症状などを *Twitter* などで伝えないよう。

・*HIV* があることで周囲に気を遣い、辛い気持ちがあるなら、同じ立場の人たちと話をすること、ピア

サポートを利用することで気持ちが楽になるかも知れません。自分は感染がわかってから身近な人にはカミングアウトしていましたが、その人たちには話せないことも同じ立場の人になら言えることも多く、話せて良かったと感じました。具体的な困り事も相談できる場になると思います。

・セクフレに陽性であることを伝えたが、すごく非難され滅入ってしまった。 どうすればよかったのかはわかりません

・そもそも、自分が陽性者だと言う必要は全くないと考えるようにしている。 きちんと治療・服薬して、*HIV* をコントロール出来ているならば、普通の人と同じように生活や振る舞いをして構わないと思う。

・*HIV* だからコレが出来ない、アレはしたくないという感情はとても良く解ります。私もそうでした。でも時間が経ち落ち着いて病気を受け入れられた時、それらは自分に対する言い訳で怠けていたんだなと感じました。その怠けていた自分を、あの時はアレで精一杯だったんだ、と許せたら少し楽になりました。

■どうなったら陽性者の暮らしやすい社会になるか？（自由記載）

回答者 377 人（うち、「特になし」22 人）でした。頻出語は以下の通りでした。

頻出語：
理解：80，知識：68，自分：67，偏見：63，知る：52，差別：43
正しい：41，周囲：31，認識：27，普通：23，情報：22

代表的なもの及び特徴的な記述を示します。なお、頻出語には下線を記してあります。

・偏見がなくなるといいんだけど…なかなか無くならない。 怖さがあるからなんだろうけど、その辺りは知識でカバーできるだろうから、ちゃんと知識を持ってほしい。 ただ脅かしの *PR* が多いじゃないですか。 *HIV* にかかったら終わりだから検査しましょう…的な。 感染したあとも生きてくんだから、そこもちゃんと *PR* してほしい。

・同性でも異性でも *HIV* というものがすごく身近なものだという認識が広がればいいと思う。 当事者にならないと実感湧かないかもしれないけどやっぱりそういう知識がしっかりあるのと無いのとは全然違う。

・服薬をしていれば周囲に感染させる可能性が低いことをもっと告知されたら楽になると思う。

・*HIV* や *AIDS* に関する知識や情報が少なすぎる。 知っていれば案ずることもない。 臭いものには蓋をする。 この日本人の気質を変えるべきだと思います。

・周囲より自分が変わりたい